

東南アジアの仏教調査報告 —タイ・ラオス・マレーシア—

藤 吉 慈 海

1 は し が き

昭和40年12月3日から昭和41年1月23日までの52日間、タイ・ラオス・マレーシア・台湾の各地を巡り、その仏教事情を調査することができた。タイでは主として瞑想法の調査をしたが、トンブリにあるワット・パクナム (Wat Paknam) の特殊な瞑想法が注目された。ラオスとマレーシアは今回が最初の調査で、十分に調査することはできなかったが、いろいろ問題の多いところで、さらに調査を推進する必要がある。とくにマレーシアは回教国と見られているが、華僑はもちろん仏教を主としているし、タイやセイロン等から来ている伝道僧の中には、本国の僧侶たちに見られない自由さがある、上座部仏教の変貌の実態を見ることができた。その点からもセイロン・ビルマ・タイを中心とする上座部仏教とその周辺にあるラオス・カンボジアとくに回教国たるマレーシアの仏教との間には、かなりの開きができつつあるように思われる。速断することはできないが、そのような相違のよって来たるところを追及してみることによって、東南アジアにおける仏教と社会との相互関係が次第に明らかになると思われる。

2 ワット・パクナムの瞑想法

この寺に伝わる瞑想法は、必ずしもタイ国に一般的な瞑想法とは言えないが、以下述べるような意味で注目に値するものである。この特殊な瞑想法は、今もなおその遺骸が柩に入ったまま、この寺の一室に安置されているチャオ・クン・モンコン・テープムニー Chao Khun Phra Mongkol Thepmuni (1885-1950) によってはじめられたものである。彼はメナム・デルタ地帯の農村に生まれ家事の手つだいをしていたが、9才の時、比丘になっている伯父につれられて寺々を

めぐりタイ語とクメール語の勉強をした。14才のとき父の死にあい、家事の責任を背負わされ米作に従事したが、22才のとき出家して比丘となり、本格的に修行をはじめた。彼はとくに瞑想の実践に関心を持ち、パーリ語の勉強によって学位を得るよりも、瞑想によって宗教的体験を得たいと思った。いくつかの meditation center を巡って vipassanā meditation を実習したが、第5番目に訪れた meditation center で瞑想中に卵2個大の輝かしく透明な円形を身体の中に見ることができた。このことは彼の師匠の瞑想法が成果をあげたことを示していた。その師匠は彼の得たものをためし、彼を選んで指導者としようとしたが、彼はただこれを知っただけで教える資格はないと思い、パーリ語の課業も放棄して遊行僧として旅に出た。托鉢の苦しさを体験し、またパーリ語の勉強もして、その余暇に meditation の修行をした。比丘になって既に12年たち、経典の翻訳にも上達したので、パーリ語の勉強を中止して、もっぱら瞑想に耽るようになった。そして比丘や信者の人たちの瞑想の指導をするようになり、幾人かの人々を智慧の段階にまで到達せしめた。その後、彼は招かれてワット・パクナムの後継者となったが、この寺はアユタヤ時代に建てられた古いお寺で、止住の僧もすくなく、酔ばらいが寺の境内で酒を飲み、ふしだらなことをし、比丘たちは秘密会議をする程までに墮落していた。彼はそれらをたてなおすために努力した。1939年までに長さ 60 m、幅 11 m の3階建のパーリ研究所を境内に建て、1,000人以上の比丘や沙弥たちがここに出入りした。彼は信者たちに病気の治療をたのまれると、ただ手紙で月日と名前と生年月日と病名を書いてよこさせ、それを見て心による遠隔治療をやった。彼は1955年に Phra Mongkol Rajmuni という宗教上の階級を与えられ、その後、さらに Chao Khun Mongkol Thepmuni と続いておくられた。その教えがひろまるにつれ、比丘や尼たちは又その教えを諸州にひろめた。そして、この方法を実践した数十万人の中、数千人が智慧のダンマカーヤの段階にまで達した。

彼の瞑想法の特色は、他に一般的なサティパターン meditation と異なり、先ず第一に身体のほぼ中心に円形の透明な領域を瞑想中に見させることにあ



写真1 ワット・パクナムの瞑想法を確立したチャオ・クン・モンコン・テープムニー

る。精神統一の方法としてはいろいろあるが、このような円形を見させるというのは極めて稀である。そしてその円形の中心に坐禅している男子の姿を見るようになり、それが次第にリファインされて天部の姿になり、さらに瞑想が深まると順次ルーパ・ブラフマ・カーヤ・ヒーナ、ルーパ・ブラフマ・カーヤ・パニータ、アルーパ・ブラフマ・カーヤ・ヒーナ、アルーパ・ブラフマ・カーヤ・パニータ、ダンマカーヤ・ゴートラブフー・ヒーナ、ダンマカーヤ・ゴートラブフー・パニータ、ダンマカーヤ・ソーターパンナ・ヒーナ、ダンマカーヤ・ソーターパンナ・パニータ、ダンマカーヤ・サカダーガミン・ヒーナ、ダンマカーヤ・サカダーガミン・パニータ、ダンマカーヤ・アナーガミン・ヒーナ、ダンマカーヤ・アナーガミン・パニータ、ダンマカーヤ・アラハッタ・ヒーナ、ダンマカーヤ・アラハッタ・パニータが見えるようになる。かくて「法を見るものは如来を見る」という仏陀の言葉の意味をよく理解するようになる。

もちろんこの境地に到達するのは容易ではないが、とにかく瞑想による内的体験をこのような段階に区別して、一段一段その境界の深まりを特色づけていることはユニークと言うべきである。実際に実習している僧尼にきくと、皆そのような体験をもっているよう

で、必ずしも暗示にかかって、そのように思いこんでいる者ばかりでもない。そのような瞑想中の体験のもつ価値は、特に高く評価すべきものではなく、むしろその人の日常生活のあり方がより重要である。しかし瞑想法としてこのような段階が規定されていること、また常に外側に向く心を内なる一点に保つために、「サンマー・アラハン」と持続的に音をたてず、くりかえすことをすすめていること等は瞑想法として注目すべきことである。

3 戒律の問題

古くから伝承されて来た仏教教団の戒律が、現在の程度に保持されているかは興味ある問題であるが、全般的に言ってマハー・ニカーイの方がダンマユット・ニカーイに比してルーズである。時代の進歩と共に古い戒律が次第に崩れてくることは自然であるが、教団の権威はこれを黙認してはいない。つねに肅正が叫ばれているが実際問題として、或る程度ルーズになりつつあることは否定できない。しかし近年寺院の新築や修築が目立ち、人口の93.54%を占める仏教徒によって支持されている僧侶たちはそうたやすく戒律をみだすことはできない。したがって想像以上に僧侶の戒律はよく保持されているといえるであろう。特にタイのように、教団への出入が比較的容易なところでは、戒律が保持できない者は自由に還俗してしまうので、教団の戒律は比較的よく保持されていると言えるであろう。

4 寺院の増加

仏歴2507年(1964)11月より仏歴2508年(1965)3月までタイ国において私が実施した仏教研究の中間報告に対し、タイ国政府宗教局長陸軍大佐ピン・ムトゥカン氏より宗教局の見解を示されたので、重要と思われる点を摘記しておきたいと思う。すなわち宗教局が仏歴2508年(1965)のはじめに調査したところによると、調査表を送った9,605の寺院についての修築、修築関係の支出内訳は表1のとおりである。

これは第2次大戦後、仏教関係建造物の新築、修築がひじょうに多いことを示す。宗教局の意見としてはこれはタイの人口増加と照応するものであって、人口の93.54%を占める仏教徒の信仰にこたえるため寺院建設の必要が生じたからであるとしている。

表 1

建物の種類	新 築 (Baht)	修 築 (Baht)
Ubosot	104,175,914	22,775,822
Wihan	22,088,603	7,646,546
Sala Kanparian	86,982,888	39,193,640
Kuti	103,918,635	25,595,938
その他	72,305,676	19,055,039
合 計	389,471,716	114,266,985

万, そのうちヴィエンチャンの人口11万と言われているが、埃ぼくて夜は薄暗い町である。翌朝、和田大使を訪ね宗教局長クルオン・パトーンマートを紹介して頂き、さっそく宗教局を訪ねた。宗教局長は1965年1月10日、日本大使館の要請によって作製した「1964年度寺院僧侶修行僧および町村団リスト」を示してくれた。それは表2のとおりである。

宗教局長の談話によると、国民の95%は仏教徒で、憲法にも仏教を国教として定めているが、僧侶の政治介入は禁止している。しかし1960年8月のクーデターの際、政治的に動いた僧侶が4、5名はいた。この国ではタイ国と同様テーラバーダ仏教が主流をなしているの、南ベトナムで見られるような僧侶の指揮する反政府デモのようなものはない。しかし僧侶の間で政談がひそかにささやかれていることは事実である。仏

5 ラオスの仏教事情

1965年12月12日バンコックからタイ航空の双発機で飛行時間1時間20分、ラオスの首都ヴィエンチャンに到着し、Settha Palace に泊る。ラオスの総人口200

表 2 1964年度寺院僧侶見習僧および町村団リスト (1965.1.10. 現在)

州 名	町 団	村 団	寺 院	僧 侶	見習僧	計	備 考
ヴィエンチャン	10	27	372 (2)	1,444	1,352	2,796	リスト中12村団の通牒なし
ボ リ カ ン	3	6	47	141	189	330	1町団より送付なし
ルアンプラバン	6	12	143 (1)	364	704	1,068	2町団より送付なし
サ ヲ ブ リ ー	5	28	133	272	930	1,202	
ルアンナムタ	1	1	22	38	172	210	3村団および1町団より送付なし
カ ム ア ン	5	19	128 (1)	385	348	733	12村団より通牒なし
サヴァナケット	11	54	354 (3)	1,066	1,359	2,425	7村団より通牒なし
セ ド ン	5	16	160 (1)未完	611	640	1,251	1村団より通牒なし
チャムパサク	3	20	153 (3)(1)未完	570	868	1,438	
ア ト プ ー	2	6	22	80	181	261	
サ ラ バ ン	3	14	93	303	281	584	
ワピーカムトン	3	17	99	213	334	547	
シ タ ン ド ン							1964年度の僧侶見習僧リスト送付せず
計	57	220	1,726 (10)(2)未完	5,487	7,358	12,845	

*寺院数中()内はベトナム寺院数を示す。これは筆者がヴィエンチャンのベトナム寺で聴取したものを付記したものである。

教徒の最高指導者は Somdet Phra Sangharaja と尊称されるボン・タン大長老で、現在ルアン・プラバンに在る。そしてその下に宗教会議があり、そのメンバーは Phra Khron Khamfanh, Phra Khron Keo, Phra Khron Ou Thet, Phra Khron At, Phra Khron Khouane Xaphakoy の 5 人の高僧たちである。各州には Chao Khana Khoueng と称する州知事相当の高僧がいて、その州の仏教徒を統率している。そのうち宗教会議のメンバーは皆、主要州の Chao Khama Khoueng を兼ねている。宗教局長は 10 年来現職にある人で日本へも来たことがあるが、その談話によると、北部国境にはテーラバダの比丘で阿片や酒をのむ者もいるが、それらの比丘は尊敬されていない。よい家庭の子弟は 1～3 カ月間僧院に入る習慣があるが、これをいやがる子供もいる。もちろん本人の自由意志にまかせているが、父母は一般に僧院に入って修養することを望んでいるようである。

教団はマハー・ニカーイとタンマユット・ニカーイに分かれているが、ヴィエンチャンではその寺院数の比は 50 対 2 位で、大部分はマハー・ニカーイに属している。南部ではタイとの交渉が多いから、タンマユット・ニカーイの寺もいくらかあるようである。しかし政府はこれを 2 つの教団に分けず、なるべく平等に取扱っている。ラオスでもタンマユット・ニカーイの方が寺院もより清浄でよく調っている。サンガラージャはマハー・ニカーイに属しているが、タンマユット・ニカーイも同様に支配している。これに対し宗教局は塔や寺院の建造物の管理やその位置決定権をもっている。

宗教局長のすすめもあって、ヴィエンチャンにあるベトナム寺を訪ねる。ベトナム語で CHÙA BÀNG-LONG と言っているが、漢字では龐龍寺と書く。なかなかりっぱなお寺で、比丘 4 人、沙弥 8 人、この外に 1 人の比丘がいまフランスに留学し、1 人はサイゴンに旅行しているようである。信者の優婆塞と優婆夷は各々数千人もいて、五戒・八戒を保っているという。布薩の日にはとくによく戒を保ち、寺に詣る者も多い。沙弥たちはつねに十戒を保っているが、ここは中国系大乘仏教の寺だから、素食すなわち精進料理を食べるのが特色である。仏殿には釈迦牟尼仏、観音、地藏菩薩等の像をまつり、朝には楞嚴呪や大悲呪等を誦し、夕べには阿弥陀経等を読み称名念仏するようである。日曜日には信者が集まるが念仏のみで、坐禅はし

ないようである。南ベトナムの大乘仏教の僧は政治に関与しているがどう思うかとたずねると、やむを得ぬ面もあるが、原則的に言ってよくないことだと言う。昨年私が調査したサイゴンの覚明寺や釈清検、釈智光、釈心覚等の消息もよく知っている。常にサイゴンとは連絡がとれているようである。大部分の信者は念仏を称えるというので、極楽世界の信仰は現代においてもなお強く支持されているかと問うと、「虚空無量、世界無窮、必有一世界名爲極楽」と書いた。そして「此是理智理論之信仰、非迷之信仰也」と書いて見せた。いろいろ現代における浄土教の問題はあるが、それ以上論議することはさしひかえた。

ワット・オン・トゥ (Wat Ong Tu) は中央寺院とも呼ばれるマハー・ニカーイに属する美しい寺で、490 年以前の開基という。現在比丘 32, 沙弥 18, 寺男 35, 尼 15 もいる大寺である。境内にパーリ語学校もあり、比丘や沙弥が 250 人も学んでいる。4 クラスに分かれ 3 月に 1 回試験をやっている。日曜学校もひらいて在俗者のために仏教を教えている。また夕方学校をひらいて、沙弥や青少年たちの学習を奨励している。布薩は月 2 回行ない、托鉢は毎朝 6 時に出ている。坐禅も起床後 4 時から 5 時までと就床前に 10 時から 12 時までの間にやるという。坐法は半跏で、1 時間やって 5 分休むようである。水想観や光を憶念する光想観とでもいうものをやるとのことである。これはプラ・マハ・サム・ラネ (Phra Maha Sam Rane) という沙弥 9 年、比丘 25 年になる 44 才の長老の話である。34 年間も僧院生活を続けているので、終生僧院に止まるかとたずねると、それはわからないという。終生僧院に止まる人は 1000 人のうち 1 人位かも知れないという。私自身は終生僧院に止まって修行したいが、どんなことがおこるかわからないから断言はできないという。境内に井戸があり、男達がこれを汲み罐に入れて市内へ配達している。これは寺の収入になるようである。

市の中心から東南へ 3 軒の地点にチャワ・ワット・ソーパロン (Chawa Wat Sopalong) とかワット・パルワン (Wat Paluang) と呼ばれる大寺がある。そこにアチャン・パン (Achang Pan) という瞑想を指導する長老が住んでいる。インドへも 2 回行ったことのある比丘で、バンコックのワット・ラク・カン (Wat Rag Ghang) で勉強しサティパッターナ meditation をやった人である。さいわいに英語のよく

できる通訳がいたので、meditationの方法やその内容について話し合った。相当の人とは思えるが、meditationによって得られる叡智的なものは感ぜられなかった。ともあれ、ここは比丘40人、沙弥36人、寺男13人、尼20人、女性信者71人もいる大寺である。そのほか境内に Orphan school があり70人の孤児が政府の支持のもとに養育されている。仏教新聞の出版等もやり、瞑想者のための小舎もたくさんあるから、将来ここはひとつの仏教センターになるであろう。

ワット・チャンタブリ (Wat Chan Tabury) は比丘17人、沙弥13人、寺男4人が住む中位の寺で、毎日修養のため托鉢に出ている。しかし食物はたいてい信者が朝7時と11時にお寺へもってきてくれる。ラオスは大体みなそうであるという。毎日、8～15家族がきまって食事をもってくる寺にはカンマカーン・ハクサンガン・ワット (Kammakān Haksanghan Wat) という寺院保護委員会があって、経済的な方面の管理をしている。この寺のプラジット・プララカン (Pradith Prarakhan) は46才で、13才のとき沙弥になり僧院生活を続けている感じのいい人である。ラオスでは、10才から17才までの少年は両親の意志で出家させることができるが、18才以上になると村長の証明を必要とする。つまり軍隊に入るべき人としてマークされていれば、村長は沙弥になる証明書を与えないそうである。もし少年が出家したいと欲するなら、お寺の住職に相談すれば、一銭も持たなくても出家できる筈であるという。しかし一般の習慣としてはかなりの費用をつかっているそうである。軍隊と僧侶の関係をたずねると、タイ国でもパーリ語の試験のうち第三階級の試験に合格した人は軍隊に入る必要はないが、その試験に合格しないと軍務に服する義務があるそうである。この寺では沙弥たちのために夜学をやっている。在俗の青年たちも集まって議論に参加していたが、この比丘のような指導者をもつ青年たちはさいわいであると思った。

バンコック発行の「京華晩報」がここでも読まれている。仏暦2508年(1965)2月13日、農暦己巳年11月21日の新聞に西貢の阮高基とか羅馬教皇保羅六世等の記事が出ている。ピエンチャン発行の華僑新聞には仏学講座として「現代青年的道德修養」と題し釈珠文という人の講義が掲載されている。「我不入地獄、誰入地獄的正義感、像仏菩薩一様、但願衆生得離苦、不爲



写真2 タート・ルアン
代表的なラオス仏教建築

一己求安楽」等の文字が目につく。通訳の南ベトナム青年鍾文作君の話によると、当地の華僑の間には数年前日本の辻政信元参謀が僧服であらわれ、奥地に入り、現在はパテトラオの軍隊を指揮しているという噂があるという。この青年も南ベトナムへ帰れば軍隊に入れられるから、サイゴンへは帰れないと語っていた。

仏教寺院として最も代表的なタート・ルアン (That Luang) は広大な敷地に、金色の尖塔が黒色の塔の上にそびえ、ラオス仏教建築の特色を示している。11月の祭典には全国から比丘たちが集まり、この寺の周囲の僧院に宿泊し、いろいろの行事を行なう由。塔に向かって左手に大きなサーラがある。仏像を一体安置するのみであるが、ここではお祭のときは説法をするそうである。11月のお祭というのはカチナ会だけでなく、いろいろの要素が含まれているようである。王様もやって来て比丘たちに供養をするそうであるから、大変なにぎわいとなる由。この塔は「金の塔」とも「王国の塔」ともいい、1566年セッタ・テラス王の建立したもの。塔の尖端は周囲の村を照らす巨大なローソクに擬せられ、内部にはシャカの毛髪や宝物が蔵せられていたと伝えられている。度々盗賊に見舞われたが奇蹟的に被害をまぬがれた。しかし1887年中国の長髮賊の叛徒が本国を追われラオスで跳梁することになり、この暴徒によって破壊略奪され、そのまま50年近く放任されていた。1930年極東フランス学院の力によって2カ年後、昔の姿を再現することができた。工事監督は Fombertaux である。ここはラオス国民の第一の巡礼地で、毎年11月に行なわれる祭典には全国の

比丘たちの外、一般人も15,6万人も集まるそうである。この塔の前庭には中興の英主セッタ・テラス王の青銅像が建っている。

なおメコン河畔にあるワット・シーサケート (Wat Sisaket) は比丘8人、沙弥12人、寺男5人いる寺で、托鉢や坐禅は随意やっている由。200年以前からある寺で、千仏洞のように古い仏像をはじめ、壁龕にたくさん仏像が安置されている。シーマには壁画があり、仏伝やジャータカのようなものである。シーマの内部も千仏洞のようになっていて、ここで説教もすれば食事もするそうで、数個の軍人の骨箱が保管されていた。門の横に十二支と思われる図を掘った石があるが、象や牛やガルドや龍が画かれているから、普通の十二支とは異なるようである。その石の下部にくぼみがあるので、小僧にきくと、薬をここで擦ってこんなにくぼんだと笑っていた。薬にする石や樹木をここですりつぶすのである。そしてそれを水に溶かして飲ませるわけだが、歯の痛みや腹痛の薬になるそうである。小僧がそのような薬をつくって信者に与えている光景は他の寺でも見かけた。

このほか有名な寺院としてはワット・プラケオ (Wat Prakeo) があるが、ここは現在拝観を許していない。ここは国王の守本尊とでもいうべきエメラルド仏像を奉安するためセッタ・テラス王の勸進によって1560年から3年かかって創建されたが兵火にかかり、エメラルド仏像は1779年カンボジア・シャム連合軍の進攻にあい、シャム軍がタイに持ち去ってしまった。これが現在バンコックのワット・プラケオに祀られているエメラルド仏像である。特に1827年の戦でことごとく略奪され、ヴィエンチャン王朝の滅亡と共に廃趾となった。1893年バンコック条約でフランスの保護国となってから再建され、現在のものはプーマ首相により修復されたが、いまは博物館になっている。

このほか注目すべき寺院は目下再建中のピヤ・ワット (Phraya Wat) である。メナム河畔にある古い寺であるが、いまのところ僧侶の姿も見かけられなかった。その外、黒い塔といわれているタート・ダム (That Dam) (別名タート・アハム) がある。実際に黒い石塔で1570年の建立というのがたしかなことはわからない。メナム河の氾濫を防ぐため、堤防強化の人柱となった5人の娘の霊に感謝するために建てたものともいう。あるいはまた、ワット・パーカムドーングの

跡であるとか、さる名僧の墓ともいうが、何の銘記も見あたらない。もちろん現在あるものは再建修復したものである。

ラオスの仏教は、大体タイの仏教と大同小異で、その民衆への浸透ぶりも極めてよく似ている。人の面前では動物の迫害殺生はしないし、一般に寛大で人なつっこく、もてなし好きで礼儀も正しいといわれている。相互の挨拶も合掌で、国の行事も王室の儀式も民間の冠婚も一切仏式である。僧侶は仏弟子として尊敬され、社会的地位も王族に次ぐものとして、人々に信頼されている。

6 マレーシアの仏教事情

マレーシアの仏教といっても、実際に見たのはペナン (檳城) とクアラルンプールだけであるが、この2つの都市の仏教的活動には興味を覚えた。先ずペナンの仏教であるが、ここは離島であるからマレーシアというよりも風土的にはセイロンを思わせる。ただ異なるのは、セイロンにない中国的色彩である。したがってこの仏教は早くからこの島に住みついた華僑の信奉する中国仏教と、タイ風のテラバーダ仏教とが雑居している。華僑の仏教であるからそのなかには道教的要素も含まれている。最も注目すべきは Penang Buddhist Association である。檳城仏学院とも称しているが、なかなか広大な敷地と建物をもっている。その活動を示す1例はこの寺の応接室にかかげられた掲示によって知られる。すなわち次のようである。

檳城佛學院

本院每逢星期二四六日晚八時起，念佛誦經，以爲恒課，又星期六晚八時半起，演講佛學一小時，歡迎各界士女參觀聽講是荷。

毎年逢正月初一日，彌勒菩薩聖誕，早晨十二點齊集佛教殿早課，以藉慶祝，并賀新禧。

毎年逢二月十九日觀世音菩薩聖誕十八日晚起至十二時

四月初八日釋迦如來聖誕初七日晚八時起至十時

六月十九日觀世音菩薩聖誕十八日晚八時起至十時

七月十三日大勢至菩薩聖誕十二日晚八時起至十時

七月三十日地藏王菩薩聖誕七月大三十日小廿九廿九日晚八時起至十時

九月十九日觀世音菩薩聖誕十八日晚八時起至十時

十一月十七日阿彌陀佛聖誕十六日晚八時起至十時

十二月初八日釋迦如來成佛初七日晚八時起至十時
以上例日，本院早九時半起至十二時止，齊集凡我社
友，以伸慶祝，并設放生法會，極救生靈，以本慈悲之
旨，務祈善男信女屆時蒞臨，

これをもても全く中国仏教的であるが，テーラバー
ダの人もやはり参詣するそうである。Sunday School
もなかなか活発で，少年少女たちがたのしそうにいろ
いろの企画で活動していた。なおこの寺が葬送儀礼の
簡素化につとめていることは，ここに掲示せられたもの
によってよく推測される。その一部を摘記する。

按佛學主義及其教導，關於喪葬事，特爲各會員指導
如下，深望各會員照此採用之

- (一) 現今習慣，凡一人死去，其死者家屬，及戚友
每多號哭，此類應當停止，及任何嘈妙之音
樂，在未殯葬前，不准在於屋宇內舉行
- (二) 元寶金銀衣紙及屋等類，不准在任何時燃燒，
及不能放置金銀紙及溪錢等類在於棺內
- (三) 殺生乃嚴重之禁止，如殺鷄鴨及其畜類，以供
祭死者，或作食品用
- (四) 習慣之朝晚哭叫死者起身與安睡，食早飯及晚
餐等，當棄免之，代此叫法因之介紹於其家
屬，當誦佛祖之名阿彌陀佛
- (五) 凡殯葬以最簡單式爲合，由此觀之，殯葬當用
如下
 - (甲) 白燈籠一對及橫祭文壹幅
 - (乙) 姓氏燈籠一對，及橫祭文壹幅
 - (丙) 音樂二副，如死者之家屬不願意有此音樂，
可完全省却不用，燒猪，六畜，三牲，金銀
衣紙，及蜜錢甜肉，概不能容納
- (六) 如有延請佛僧唱歌祈禱，不可使其隨送殯隊，
當載之直往墳場，而在該墳場守候棺柩之臨
止，以做作安葬或火葬事務，此段之原理，實
因佛教三寶訓令僧衆之一令

これを見ると，この檳城仏学院が仏教精神にのっ
つて，華僑の葬送儀礼の形式主義をただそうとしてい
るのがよくわかる。

この檳城仏学院の隣にプロテスタントの教会がある
ので訪ねると，Ake Haglund 牧師夫妻が歓迎してく
れる。スエーデン人で沼津にいたこともある由。仏教
からキリスト教に改宗した楊牧師の講演会のポスター
があるので，その内容をきくと，楊牧師は罪の問題が
仏教ではよく解決できなかつたのでキリスト教徒にな

った由。Haglund 牧師に仏教の欠点と思うところを
きくと，(1) 仏教は神をよく説明できぬ。無神論的
である。(2) 無神論から有神論になったのが仏教で
ある。(3) 人間観もはっきりしない。(4) 自力と
他力の相克である。仏教はひとつだったはずである
が，今日は自力教と他力教とあって，それがたたかっ
ているのはよくわからぬという。

観光寺院としては極楽寺が有名で，すでに学界にも
紹介されている¹⁾。有名な Snake Temple を訪ねてみ
ると，これは仏教寺院ではない。道観風のもので，た
くさんの蛇が飼育されていて，珍しいところであ
る。

仏教寺院としてはセイロン僧の住むテーラバーダの
寺がある。1921年の創立で，1935年に Ceylon Temple
として開寺したそうである。この寺の住持に大乘と小
乗の問題をたずねると，このように華僑の多いところ
では自分はテーラバーダの比丘で戒律を保っている
が，どうしても大小乗を自分の心の内で調和せざるを
得ないという。この人によると小乗は inner circle で
あり，大乘は outer circle だという。中心はひとつだ
からこの2つは矛盾しないとうまいことをいう。この
島のキリスト教についてきくと，キリスト教は実益を
かねて信仰にひき入れているから，貧乏人や名誉のた
めに入信する人もあるという。この寺の活動としては
月に1回20人位の信者が集まって八戒を保つそうであ
る。200人から300人あまりの信者がいるが，平常は五
戒を保っている。托鉢には行かないそうである。ムス
リムを改宗させることはできない。もし改宗したら政
府のみならずムスリム社会から認められなくなるから
という。この比丘によるとペナンの人口の70%は仏教
徒と見ている。この比丘は Pandit P. Pamaratana
といい，かなりのインテリ僧である。Mahindarama
Pali School をも附設して活動している。

現代の中華僧のなかで書画で有名な竺摩法師が
Pangkor Rd. にある The Buddhist Triple Wisdom
Auditorium にいることを聞き訪問する。竺摩法師
は先年日本にも来たことがあるが，英語ができぬので
筆談をする。台湾に逃げて台湾で活躍している印順法
師の著，浄土新論についての批評をきくと，印順法師

1) C.S. Wong (黄存榮), *Temple of Paradise*
(『檳城極楽寺新誌』) Singapore: Malaysian
Sociological Research Institute Ltd., 1963.

は書中で上帝を否定しながら実際は肯定している。これはおかしい。また西方浄土の存在を否定しているのは太過火、太過であるという。夕食の御馳走になり、英文仏教書や念珠やメダル等を販売しているので、それらを買って帰る。

マレーシアの首府クアラルンプールではマラヤ大学の王廣武教授をアジア経済研究所の萩原氏と共に訪ね会談する。中国で禅と浄土が同時に行なわれてきたのは、日本のように禅が武士階級に受容されたというような特殊な階級がなく、すべての人々に受容されたからではないか。何もかも一緒にしてしまうのが中国人の特殊な習性ではないか。禅と浄土どころか、朱子学も老荘も仏教と同じものとしてしまうからだと思う。円融思想が中国人の根底にあることを忘れてはならぬという。日本のように禅と浄土とが厳しく別れている仏教から見ると、たしかに中国仏教にはそのような根拠があり、禅浄雙修の中国仏教を墮落仏教とのみは見られぬように思われる。

西明寺というタイの寺を訪ねると、6人のタイ比丘が住んでいる。マハー・ニカーイに属し、Wat Washuthat と呼んでいる。8年以前に行なわれた仏滅2500年記念に建てられたので Buddha Jayanti Temple と呼ばれている。寺男はいないが、優婆塞は15人いる。これは主として中国人とのこと。ワン・プラの日には4,50人の人が集まり、その日は5人から8人位の人が八戒を保つそうである。タイ人もすこしは来るが主として華僑らしい。クアラルンプール市内にタイ寺が4、マレーシア全体に70位あるそうである。しかし托鉢は全然やっていない。回教国だからやっても供養してくれる人がいないからである。それでもウポーサタはお寺でやっているというのが実際にはどうかかわからない。戒律の変化が次第に見られるように思う。

Petaling Jaya にある湖浜精舎に伯円法師を訪ねる。この法師は福建省出身の中華僧で、19才のとき出家し現在53才。1941年にペナンの極楽寺に住し、1961年以來ここに止住しているとのこと。筆談で禅と浄土の問題を質問すると、中国では以前は禅と浄土の間には厳格な区分があったが、その後、その区別がなくなり坐禅と念仏は雙修されている。「有禪有浄土、猶如戴角虎、這是説禪中加浄土、尤覺心境易澄」ともいう。この人の体験の語とうけとれぬこともないが、こ

のようなことは中国仏教の禅浄雙修派の人々の語録中に見出される語である。念佛は歩いている時の澄心の助けになると言う。また「念佛得到佛光的益照」ともいって浄土の信仰も堅いようである。かなりの学僧であると思ったが、やはり太虚門下で印順法師とは親しいようである。

この博物館にある Kelantan Royal Circumcision Ceremony はおもしろいものである。ケランタンの Royal Family で1932年に行なわれた割礼の儀式を、ここに模型化して展覧している。百年以前まではマラヤでは割礼の方が結婚式より重要視されていた。それでその儀式も結婚式よりより鄭重なものであったそうである。今日では生後3日目か1カ月以内に、極めて簡単に行なわれているそうである。そしてその時行なわないと、7才になった頃に行なうそうである。そのやり方は男根にちょっと傷をつけるだけだそうだが、この Royal Family の場合は、7才位の王子が大きな鳥の背中に乗せられ盛大な行列をしたがえて、割礼の行なわれる家に入るのである。そして2人の侍女と検視の武士のいる前で、王子を寝台の上にねかせ、上からつったカーテンの中でやるようである。寝台の横にはピンセットと竹製の小刀がおいてあり、もし執行官がやりそこなって王子の機嫌を損じたら、直ちに死刑に処せられることもあったそうである。萩原氏と共に中国人の回教徒の指導者馬天英先生のお宅に招かれ、回教事情をたずねたとき、割礼の意義をきくと、先生は美しい夫人の方を気にしながら、それでも卒直に割礼は清浄・成長・自瀆・性交に関係があると答えられた。断食の意義については、断食中は仕事の能率もあがらないが、断食することによっていろいろのことが教えられる。たとえば①貧乏人の心情を知ることができる。②野心ある者を平和を愛する者にする。③頭脳のみならず骨まで浄めることができる。④肥えるのをふせぐ。⑤忍耐強くなる。⑥愛他の心をもつようになる。⑦断食の後、食物の本当の味を知る。⑧理性による動物との相違を自覚する。⑨克己心がつよくなり、戦争にも強くなると説明して下さった。しかし子供たちは可哀相だから断食させていないそうである。

この博物館にもうひとつ注目すべきものがある。それは、背丈1mたらずの観音菩薩の青銅の立像である。²⁾

2) *Federation Museums Journal*, Vol. VI, New Series, 1961; Kuala Lumpur: Museums Department, Federation of Malaya.

その腰帯の向って左前に「虎の顔」が見える。ちょっと見ると見落してしまうが、写真にとったのを見ると、たしかに虎か猫の顔である。この観音の立像は7世紀から10世紀頃のもので、マレーシアで発見されたと説明されている。頭上に化仏があり、左右3本ずつの手には宝珠や経巻や水瓶を持っている。まぎれもない観世音菩薩で、この虎か猫と観音さまとの間にとどのような関係があるかが問題である。



写真3 タンマナダ長老と八戒を保っている
少年少女たち

次にセイロンからきているダンマナダ長老の寺を訪ねると、Buddhist Missionary Association と称し、境内に女子中学校もあり、なかなか活発な活動をしている。比丘3人、寺男2人いるだけだが、クォーターの機関誌をはじめ多くの英文仏教書を刊行している。この人はインドのベナレス・ヒンズー大学で勉

強した人だけに、セイロン僧としては最も進歩的な比丘である。「われわれはもはや大乘とも小乗とも呼んでいない Buddhism で何でもやっている」といって、小さな小乗の戒律は捨ててしまっている。律できめられていることでも、現代にあわなければ捨てるという自由な態度であるから、夕食もとれば、音楽もきく。葬式に行きお経をよみ赤い紙に包んだお金ももらう。比丘がお金をもらうことは本当は律に反するが、実際問題としては、それが便利だから行なわれている。貨幣はいかぬが紙幣やトラベラーズ・チェックならよいという考えもある。比丘は金銀財宝を身につけてはならぬという律があるからだが、このような回教国で伝道するにはやむを得ないことであるというよりも、それが必要になってくる。伝道のさまたげになる戒律ならいさぎよく捨てよというのが、ここにいる比丘たちの考えのようである。これはまことに注目すべきことであって、セイロンやタイやビルマでは見られない傾向である。

マレーシアはいまラーマン首相によって率いられている新興回教国であるが、その national mosque の完成式の時の式辞を見ても、マレーシアは他の宗教に対して寛容である。この national mosque の建設の際も、他の宗教の信者から多額の寄付をうけており、政府もまた他の宗教に援助しているとのべている。回教国としては珍らしく寛容な宗教政策をとっているのも、この国に多い中国系マレー人を顧慮してのことであろうと思われる。